下郷町大内宿における集落景観の認識に関わるオモテの景観構造の特徴に関する研究

A Study on the Feature of the Landscape Structure of OMOTE in Connection with Recognition of Village-landscape of Shimogo-machi Oouchi-juku

孫 鏞勳* 下村 彰男* 浜 泰一**

Yonghoon SON Akio SHIMOMURA Yasukazu HAMA

Abstract : The system of Preservation Districts for Groups of Historic Buildings had accomplished landscape conservation of historic villages by preservation of landscape element and harmonization with environments surrounding it. However, on recent trend, the concern of preservation subject has moved from “landscape element” to “village-landscape”. A village-landscape is represented from the impression of experience in the village. The study purpose is clarifying the feature of the landscape structure of OMOTE in connection with recognition of a village-landscape in Oouchi-juku. OMOTE is widely vacant space between the street and the house and between the house and the house, and OMOTE is a place that impresses the feature as a lodging-farm village. As the result of research, the change of the village-landscape that the lodging-farm village-feature becomes indefinite can be recognized through the feature of the landscape structure of OMOTE. It was shown as visually- disconnection to the background living field by the form of a temporary construction for tourist interest. Furthermore, the change of the landscape structure of OMOTE has affected the change of residents’ recognition concerning the feature of the village-landscape, too.

Keywords: Village- landscape, Landscape structure of Omote, Preservation Districts for Groups of Historic Buildings, Landscape management, Shimogo-machi Oouchi-juku

キーワード: 集落景観, オモテの景観構造, 伝統的建造物群保存地区, 景観管理, 下郷町大内宿

1. 研究背景と目的

日本において歴史的環境の保全を扱う議論が登場したのは1960年代のことである¹⁾。高度経済成長による町並の変貌から歴史的環境を守ろうとする運動が次々と起こった結果、1975年文化財の定義の中に「周囲の環境と一体をなして歴史的風致を形成している伝統的建造物群で価値が高いもの」が加えられた²⁾。歴史的環境の保全に関する先駆的制度であった伝統的建造物群保存地区（以下、伝建地区）制度は、価値がある「伝統的建造物」や「環境物件」等の要素の保存と周辺環境の修景により歴史的環境を保全するものである³⁾。開発により失われた歴史的建造物群の保存からはじめられた伝建地区制度は、現在保全対象の概念を拡大しつつ「建造物群」等の保存から集落景観の保全へ関心が移っている⁴⁾。しかし、本来の伝建地区での保存対象である「歴史的建造物」や「環境物件」と保全を目指そうとする集落景観とは性質が異なるものである。

集落景観は、一般的に集落全体に関わるシーンやシークエンスの体験が総合された景観であり、「場」の景観と理解できる⁵⁾。したがって集落景観は、景観要素だけでは表現できない総合的表象である。そして、文化財保護法での集落景観の保全の限界は、保全対象に含まれた「生活領域」の扱いに関する研究や保全対象に含まれない集落景観の構成上に価値がある景観要素の再認識と管理に関する研究等の先行研究で明らかになっている。したがって集落景観の保全は、本来文化財保護法の範疇を超える課題で、計画的に取り組む必要があると考えられる。

集落景観の保全の究極的な目標は、歴史、文化、生活様式等により形成された集落の「個性」を維持しながら、それを住民の共通認識とし、域外の人々や後の世代に伝えていくことである。現在の「保存」や「修景」の成果は、この目標達成に必要な集落景観をより鮮明にすることは乖離することが少なくない⁶⁾。景観要素の保存だけでは、集落景観の一部が強調され本来の姿が歪

曲されたり、不明瞭になったりすることが生じ得る。むしろ景観要素の相互関係が造り出す空間的關係（構造）に注目することが重要である。

また、伝統的集落における集落景観の認識は、路上で得られる景観の体験や活動を通して形成されるものである。したがって、住民や来訪者が路上、特に主要な通り上で体験するヒューマンスケールでの景観の要素やその構造が、集落景観の特徴や変化を理解することに関わってくると考えられる。

本研究では福島県下郷町大内宿（以下、大内宿）を対象地に、ヒューマンスケールでの景観の構造と集落景観の構成や変化の認識との関連をみる。大内宿において通り道は、主に表通りと高倉神社に至る表通りの脇道になる。特に表通りからは茅葺の家並みが揃って見えるとともに表通りと家との間に広く空いている空間（大内の住民はその空間をオモテと呼んでいるので、以下、オモテとする）が見える。オモテは、「大内宿は通りと家との間や家と家との間が広く空いていることで宿場町より農村としての特徴が強い」⁹⁾という吉田桂二の指摘のように大内宿の集落景観を印象付ける注目すべき場所である。本研究では集落景観の認識を担う景観の構造として大内宿におけるオモテの景観構造に注目する。集落景観とオモテの景観構造との関連に着目し、集落景観の認識に関わるオモテの景観構造の特徴を明確にすることを目的にする。

2. 対象地の概要と調査方法

(1) 対象地の概要

福島県南会津郡下郷町大字大内地内に位置する大内宿は過去会津若松と日光街道の下野今市を結ぶ会津西街道に造られた山間茅葺家並みの宿場で半宿半農の営みをもつ集落である。現在に至るまで大きな変化が行われず維持されていた大内宿は1967年相沢韶男という学生にその価値が見出され、1981年重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建地区）に選定されることになった。

* 東京大学大学院農学生命科学研究科 ** 東京大学大学院新領域創生科学研究科

現在は周辺の有名観光地である「塔のへつり」や「湯の上温泉」を上回る観光客を集め賑わっている。重伝建地区の選定 20 年を越え、保全活動や観光客に対する対応が定着し、保全に関する官民間のコンセンサスもある程度形成されている。

（２）調査方法

大内宿における集落景観は集落の歴史に関する「下郷町大内宿伝統的建造物群保存地区見直し調査報告書」等の文献資料や住民ヒアリングに基づき分析し、空中写真・地形図を用い景観要素と要素相互の空間的關係でその構成を図化した。集落景観の変化は重伝建地区選定以前と現在の全景写真の比較により分析した。

また、オモテの景観構造は重伝建地区選定以降、観光業の規模増加とともに変化している。住民アンケート調査と各家屋のオモテの景観写真分析をもとにオモテの景観構造の特徴とそれによって認識される集落景観を分析した。

表－１ 現地調査の日程と内容

日程	調査内容
2005.6. 8～9	・住民ヒアリング(大内宿の歴史・生活・景観の特徴など:対象者 10 人) ・景観写真(全景)
2005.9. 8～9	・住民アンケート(観光業の類型及び開始年代、下屋の設置年代など:対象者 33 人) ・景観写真(全家屋を表通りから撮影:オモテの景観構造に関する分析)
2005.10. 17～18	・景観写真(全家屋を生活道路から撮影:裏側小屋のはみ出しに関する分析)

３．集落景観の構成とその変化

（１）大内宿における集落景観の構成

表－２ 伝統的形態の形成に関する略譜

年代	大内宿における伝統的形態の形成
1600 ～	幕府政治時代に敷地割り
1881	東京へと馬車輸送が増加
1884	会津街道開通(国道 121 号)
1886	街道中心にあった一本の水路を両側に分ける。両側水路幅 50cm
1965	水道開設
1969	街道にアスファルト舗装
1977	大内ダム建設着工。茅葺からトタン屋根
1981	重伝建地区選定
1982	東側の生活道路整備
1986	駐車場整備
1988	西側の生活道路整備

表－２は大内宿における伝統的形態の形成に関する略譜である。

宿場町が下郷町大内に開かれたのは 17 世紀の前半と考えられている¹⁰⁾。当時の敷地割りにより、南北につながる街路沿いに 44 戸の茅葺家屋が整然と軒先を揃えるようになった。当時の大内宿は宿稼ぎだけではなく田畑を持ち農業を生活基盤としていた¹¹⁾。

三方道路¹²⁾の提案とともに開通された国道 121 号線（米沢～宇都宮線）は大内宿を幹線交通体系からはずれさせた。その結果、高度経済成長下においても旧姿を良くとどめることとなったが、一方で宿稼ぎがなくなり、集落経済は農業等の周辺自然環境に頼る生業だけとなった。また、地理的に水田が少ない山村である大内宿では江戸時代から続いていた炭焼きや麻栽培を主要生業としており、炭焼きの材料になる原木は周辺の森林から切出し、村周

辺には麻畑が多くあった。そして、麻生産が減少した大正中期からは養蚕・煙草の順に主要生産物が変わり麻畑は桑畑・煙畑の順に変化した。水田は本来少なかったが、明治末期から大正にかけて、農業の技術的改良と開墾奨励により水田の開墾・拡張事業が行われ¹²⁾、時代とともに麻畑・桑畑・煙畑は米や大根やイチゴ等食料畑に姿を変えていった。

その後、周辺自然環境に頼る生業から集落の経済状況を回復させる新たな収入源になったのは 1977 年の大内ダム工事である。大内ダム建設に関連する一連の補償や建設工事に伴う就労の機会、商業活動の促進等は、かつてなかった社会的経済的変容をもたらした¹⁴⁾。その経済的余力は家屋の補修や茅葺根のトタン覆いの実施等につながり、町並みの外観を変容し始めたと考えられる。茅葺の家屋が失われつつあることで集落の町並みを保存したい行政と大内ダム建設以降の地域経済を成り立たせたい住民との両側の立場から 1981 年に重伝建地区選定を受け入れることになる¹⁵⁾。重伝建地区選定により、保存地区内の生活基盤施設拡充と観光施設整備として東西両側の生活道路整備、駐車場整備等が行われた。

以上、大内宿における伝統的形態の形成に基づき、集落景観の特徴を空中写真・地形図を用いて空間的に分析した。集落景観を構成する主な景観要素は、図－１の（a）のように「点」・「線」・「面」になる景観要素に分類できる。そして景観要素の相互関係では、図－１の（b）に示すように、南北方向につながる表通り沿いに茅葺家屋が整然と軒先を揃えている特徴と、東西方向に配列された敷地（オモテ・母屋・小屋・庭）・畑・田んぼ・森林が規則的につながっている特徴がみられ、南北や東西の線上に規則的な配置を示す「軸」が存在すると考えられる。そこで、大内宿の空間のなかでこれらの「軸」を、宿場町としての特徴がみえる「南北軸」、農村としての特徴がみえる「東西軸」と名づけた。大内宿の集落景観の構成は、図－１の（c）のようにこうした「南北軸」と「東西軸」を骨格に構成されるという特徴を有している。

（２）集落景観の変化

大内宿の集落景観の構成がどのように変化しているかを大内宿の重伝建地区選定以前の写真と現在の写真を用いて把握した。図－２の（a）の 1972 年写真は表通り北側の正法寺を視点場としている。正法寺からみる大内宿は、線上に揃った茅葺家並みが写っており、宿場町としての特徴が読み取れる。この写真からは共通の生活基盤を持つ集住体として人々の共同意識が感じられる。図－２の（b）の 1969 年写真は、街道の東側にある集落を見下ろす森林を視点場にしている。撮影者は屋根から湯気が上がる風景を撮る意図で撮影したものであるが、宿場の風景よりは山奥集落の田園風景のような印象がある。東側から西側にかけて畑・庭・小屋・母屋・森林の景観要素が整然にみえる空間的關係は農村としての特徴を認識することができる。

図－２の（a）の 2005 年写真では変化があまりみられなく、重伝建地区選定後に行われたトタン被覆屋根の修復や他建造物の

図－１ 景観要素と要素相互の空間的關係にみる集落景観の構成

図-2 南北軸と東西軸の全景からみる集落景観の変化

修景等の「伝統的景観保存事業」¹⁸⁾により、まとまりが強調され、宿場としての特徴は一層明確になっている。一方で図-2の(b)の2005年写真では全体的に小屋の規模が大きく増築されていることや畑が減少したこと等の原因から1969年と比べ雑然とした印象が強くなっている。重伝建地区選定後、年間大内宿を訪れる観光客は大幅増加しており、表通りは保存を目指す代わりに裏側が生活空間として小屋等の改築が頻繁に行われていたと考えられる。更に、下郷町大内宿伝統的建造物群保存地区保存計画の「環境の整備等」に電柱・有線TVや車庫等を町並み裏側に移転・移設すると定められているように、管理する側からも表通りの茅葺家並みを保存対象にする代わり、生活関連のものは母屋の後方の生活道路周辺で隠すように誘導していた。したがって、農村としての特徴を把握できる東西軸は生活関連施設が集められた生活道路によって分断され、集落から畑、田んぼ、森林へと連続する集落景観の構成が希薄になっている。その結果、農村としての土地利用の関係性を認識し難くしている。

以上の分析から、大内宿における集落景観の変化は、宿場の特徴は強調されていく一方で、農村の特徴は弱くなっていることであるといえる。

4. オモテの景観構造の特徴とそれにより認識される集落景観

(1) オモテの景観構造

本来大内宿におけるオモテとは表通り沿いにある空間で、隣の敷地との境界線内の自分に属する外部空間を意味する。古くから共同意識が高い大内宿でオモテは自分に属する外部空間であるとともに共同の空間として認識されている。表通りの水路が1本であった当時までは、表通りに対するオモテの空間領域は不明確であった。以降1本の水路が2本に分けられ、オモテの空間領域は図-3のように①の表通りに対する水路の内側と②の隣敷地の境界の内側として明確になった。

集落景観の構成から、オモテは宿場町や農村の特徴を見せる両軸の交差点にある。宿場町が盛んであった時代からオモテは客を迎える住民共同の社会活動の場所であるとともに個人の生業活動の場所でもあった。麻を栽培した時代では麻を干す時期になると、表通りは人が通る一部を残して麻でうめつくされたと伝える記録や、昭和42年の煙草を干す風景の写真からオモテの性格が読み取れる。

先述のとおり、重伝建地区選定以降、東西裏側に整備した生活道路は、既存の母屋・庭と畑・水田というつながりに対する認識を弱めることになった。更に、母屋を軸にして表通りと裏側の生活道路に「保存・観光客向き」と「生活・住民向き」に役割が分担されるようになる。現在のオモテは観光客が立ち寄って休む空間として機能し、テーブルが置かれたり花壇が整備されたりしている。

オモテの景観構造は図-4のように、基本要素としてa.2棟の母屋、b.たたき、c.玄関、d.背景の田畑、山等があり、付加要素としてe.下屋がある。基本的には2棟の母屋が離れており、

図-3 オモテの空間領域

図-4 オモテの空間構造

背景の田畑、山等が見通せることが大内宿におけるオモテの景観構造の特徴である。

(2) オモテの景観構造の変化とそれに伴う集落景観の変化

オモテの景観構造の変化に影響を与える要因として、「食堂」・「スナックバー」・「土産屋」・「野菜・花卉の販売」・「民宿」の5つの観光業の類型に着目し、開始年代を分析した。

また、オモテの景観構造の変化については下屋に注目し、その設置年代と形態による背景への見通しについて分析した。形態による背景への見通しは、図-5の3タイプに分類できる。Aタイプは下屋が設置されていない既存型、Bタイプは下屋の奥に生活空間を見通すことはできる空間分離初期型、Cタイプは下屋の奥に「壁」「のれん」等を設置し見通しを防げる空間分離型と名づけた。

図-5 下屋の形態による背景への見通しの類型

オモテの景観構造からみるとAタイプは背景の見通しができ、Bタイプは下屋が設置されるものの背後の見通しは保っているもの、そしてCタイプは下屋等の設置物などにより背後の見通しを遮っているという特徴を持つ。

そして、オモテの景観構造の変化による集落景観への影響に関しては、母屋裏側の小屋に注目し建築線からのみ出しの有無を分析した。分析対象の家屋は北から立ち並んでいる東側20軒、西側17軒の中で、配置や形態が異なる4棟を除く33棟である。

表-3はオモテの景観構造の変化及び集落景観への影響をまとめたものである。表-3から観光業の類型の中で土産屋が下屋の設置にもっとも関連していることが分かる。土産屋をやっている27家屋の中で、21棟で下屋が設置されており、土産屋をやっていない6棟の中では1棟だけに下屋が見える。土産屋をやっている家屋は1988年まで2棟だけであったのが、重伝建地区選定以降の観光化とともに非常に増加し、現在は調査対象の33家屋の中で27家屋になっている。

表-3からでは、オモテの景観構造の変化としてBタイプからCタイプへの転換は直接的には読み取れないが、Bタイプに比べCタイプの方が下屋を全面的に土産屋に活用する傾向がみられ、土産屋を積極的にやることにつれBタイプからCタイプに

転換する可能性が高くなると考えられる。

Cタイプは背景の見通しができないため、表通りと母屋の裏側の視覚的に断絶する。図-6は現在の表通りと母屋の裏側の視覚的断絶箇所を示している。⑬から⑰に至る家屋群では表通りと裏側の連続的な視覚的断絶がみられる。

表-3の裏側小屋のはみ出しの有無をみると、Cタイプ13棟の中で10棟にはみ出しが生じている。表通りからの見通しが出来ないことは、母屋の裏側の変化に影響を与えると考えられる。母屋の裏側の変化は、全体の集落景観の構成にもつながる。

下屋等の建具に対する制限は「伝統的建造物の性格と修景の基準」により、上すかし雨戸（上40cm格好棧付）巾3尺1本溝引込みとなっている。これは表通りを視点場とする場合に生じる景観不調和を防ぐためのものである。オモテの景観構造の変化とそれに伴う集落景観の変化は、保全基準から見落とされている。したがって、表通りの茅葺家並みは本来有した生活空間との緊密な関係から乖離されていくと考えられる。

表-3 オモテの景観構造の変化
及び集落景観への影響

家屋 番号	観光業の種類				オモテの 景観構造		集落景観の 構成	
	食	ス	土	野	下屋の 設置	見通し 類型	母屋の建築線からの 裏側小屋のはみ出しの有無	
1				●	○	Bタイプ	無い	①
2				○	○	Bタイプ	無い	②
3				○	○	Cタイプ	有る	③
4				○	○	Aタイプ	無い	④
5	○			○	○	Cタイプ	無い	⑤
6	○			●	○	Bタイプ	無い	⑥
7				○	○	Aタイプ	無い	⑦
8	●			●	○	Bタイプ	無い	⑧
9				○	○	Aタイプ	無い	⑨
10	○			○	○	Bタイプ	無い	⑩
11	○			○	○	Cタイプ	有る	⑪
12	○			○	○	Cタイプ	有る	⑫
13	○			○	○	Cタイプ	有る	⑬
14	○			○	○	Cタイプ	有る	⑭
15	○			○	○	Cタイプ	有る	⑮
16	○			○	○	Cタイプ	有る	⑯
17				○	○	Bタイプ	無い	⑰
18				○	○	Bタイプ	無い	⑱
19				○	○	Aタイプ	無い	⑲
20	○			○	○	Aタイプ	無い	⑳
21	○			○	○	Bタイプ	有る	㉑
22				○	○	Cタイプ	無い	㉒
23				○	○	Bタイプ	無い	㉓
24				○	○	Cタイプ	有る	㉔
25				○	○	Aタイプ	無い	㉕
26				○	○	Bタイプ	無い	㉖
27				○	○	Aタイプ	無い	㉗
28	○			○	○	Aタイプ	無い	㉘
29	○			○	○	Cタイプ	有る	㉙
30	○			○	○	Cタイプ	無い	㉚
31				○	○	Aタイプ	無い	㉛
32				○	○	Aタイプ	無い	㉜
33				○	○	Cタイプ	有る	㉝

Index
食：食堂、ス：スナックバー、土：土産屋、
野：野菜花卉、民：民宿
観光業の開始年代や下屋の設置年代
○：1984年以前、●：1985年～1994年、◎：1995年～2005年

図-6 集落全体にみる
現在の表通りと母屋の
裏側の視覚的断絶

4. 考察

大内宿における集落景観は半宿半農の暮らしを語るもので、表通りの両側に立ち並ぶ景観要素の規則的配置により全体の構成が理解できる。大内宿における半宿半農の特徴を見立てた吉田桂二の知見のようにオモテの景観構造には半宿半農の生活様式が象徴的に表れており、オモテの景観構造は住民や来訪者が大内宿の集落景観を認識する過程で大きな役割を果たしていると考えられる。

大内宿における集落景観の変化には主に3つの要因がある。一つは景観要素の変化であり、もう一つは景観を管理する側の政策的誘導による変化である。特に大内宿のような伝建地区では「歴史的建造物」と「環境物件」等の景観要素の保全に注目する保全方策を行っているため、要素相互の空間的関係に関する配慮を欠くと、集落景観に変化を及ぼす。下郷町伝統的建造物保存関係例規集にみる大内宿の保全活動は茅葺家並みと日常生活とを分離しており、茅葺家並みの保存に対して母屋の裏側は日常生活の空間として決められ日常生活の「景」を隠す場所になっている。このような景観管理の進め方により、宿場町としての大内宿の特徴は強調され明確になっている一方で、半宿半農であった大内宿の歴

史に関しては、景観上消失してきていると考えられる。

3つ目の要因は十分な地域認識に欠ける日常生活や経済活動が引き起こす影響である。集落景観を構成する景観要素の空間的関係の変化は住民や来訪者が体験するヒューマンスケールでの景観としてオモテの景観構造に変化を及ぼしていた。また同時にそのオモテの景観構造の変化は、後背地の小屋・庭、農地や森林等への見通しを遮り、集落構成の可視性を減じて、集落景観の構成に対しても影響を与えていると考えられる。観光業が進むことに伴い増加している空間分離型の下屋の設置は、表通りからの見通しを防ぎ母屋の建築線を超えはみ出している小屋や工作物の設置の傾向をみた。母屋の裏側に整然として建ち並んでいる小屋や工作物は集落景観の構成を混乱させることにつながると考えられる。

現在の景観管理の手法では、保全対象である茅葺家屋群を、舞台のように宿場として誘導しており、本来、伝えるべき半宿半農であった大内宿の歴史的特徴は消失しつつある。オモテの景観構造に注目すると、そのような集落景観を構成する景観要素の空間的関係の変化に気づき易くなるが、オモテの景観構造の特徴に関する理解が不十分な状況では、そのような集落景観を構成する景観要素の空間的関係の変化に気づき難い。

半農半宿であった歴史を有する大内宿の特徴をとどめていくためには、集落景観を認識できる形態でオモテの景観構造を維持していくことが不可欠であり、オモテの景観構造を維持することが集落景観の保全を支えることになると考えられる。

補注及び引用文献

- 1) 西村幸夫（1997）：環境保全と景観創造：鹿島出版社，144-162
- 2) 太田博太郎（1981）：歴史的町並みの総点検：環境文化No.50，1-3
- 3) 孫輔勲・黒田乃生・下村彰男（2004）：韓国安東河回村と岐阜県大野郡白川村荻町にみる歴史的景観の管理に関する比較研究：ランドスケープ研究 67(5)，723-726
- 4) 黒田乃生・小野良平（2003）：白川村研究の系譜にみる文化財としての集落景観保全における問題点：ランドスケープ研究 66(5)，665-668
- 5) 篠原修篤（1998）：景観用語事典：彰国社，28
- 6) 金弘己・宗本順三（1999）：伝建地区の現状変更行為における住民の建築希望内容と町並変容の研究；近江八幡市を事例として：日本建築学会計画系論文集No.518，229-236
- 7) たとえば、西山徳明・三村浩史（1995）：伝統的建造物群保存地区における景観管理計画に関する研究；白川村荻町合掌集落を事例として：日本建築学会計画系論文集No.538，133-140，黒田乃生・下村彰男・小野良平・熊谷洋一（2001）：白川村荻町伝統的建造物群保存地区における集落景観の特徴とその保全に関する研究：ランドスケープ研究 64(5)，759-764，稲垣修・大澤啓志・小野崎敦（2004）：散居集落景観保全に向けた敷地林における住民意識及びその分布・植栽形態と景観施策に関する研究 岩手県胆沢町を事例として：農村計画学会誌 23(1)，41-51
- 8) 孫輔勲・下村彰男・伊藤弘（2005）：韓国安東河回村における空間構造の認識に果たす街路景観の役割に関する研究：ランドスケープ研究 68(5)，855-858
- 9) 吉田桂二（1986）：町並み・家並み事典：東京堂出版，28
- 10) 大内宿場保存会（2000）：会津御蔵入り・南山通り 大内の宿：大内宿場保存会，9
- 11) 相沢詔男（1999）：村への提案：ゆいデク叢書，58
- 12) 幕藩体制が終わり、福島県令に任せられた三島通庸は、会津地方一帯の農工商全般にわたる事業を推進するために三方道路を提案する。前掲書 11)，53
- 13) 下郷町・下郷町教育委員会（1988）：宿場大内茅葺きの町並み；下郷町大内宿伝統的建造物群保存地区見直し調査報告書，9
- 14) 文化庁文化財保護部（1998）：伝統的集落における歴史的環境整備を中心とした地域活性化方策の調査・検討報告書，32-33
- 15) 用いた過去の写真は相沢詔男が撮影した大内宿写真から抜粋したものである。前掲書 11)，246-247
- 16) 公共的な景観整備として大内宿で行った事業は歴史的建造物の保存の他に、表通りのアスファルト舗装を土壌に修復し、表通りの電柱を地中化する等の事業がある。下郷町伝統的建造物群保存地区関係例規集：下郷町教育委員会，17
- 17) 本論文でのオモテの定義はヒアリング調査の資料を根拠とする。前掲書 11)，49
- 18) 前掲書 14)，109